

エレナと ★ウツウツ side:M しゅっ♡



『えっ、私とボクシングしたいの？』
リング上でマススパーをしているエシナママ
汗の玉をキラキラと反射させながらきれいな動きを見せる。
そんな可憐な少女に、俺は思わずスパーの申し出をしていた

『マススターも知っての通り私は魔術師だから…
体術はそれほど得意なわけではないのだけれど…』
言いよどむエシナママを
俺は自分でもちよっと引くくらい熱心に説き伏せていた





「いいわ、そこまで言うのなら…
拳闘は少しかじって時々練習している程度なのだけれど
それでもよしかったら私が相手してあげましょう♡」
「嬉しそう♡」
「魔術師の間では魔力同調のセッションもしてあげようか？」
「魔力供給…？ セツクスのことだ」
「でも…同調って言うてるでしょ！」
「でもママが少し照れながら、グローブを口元に引き寄せてウインクをする
（最高にかわいい…♡）」
「違うものだった
あけても…よくってよ♡」

そんなこんなで俺はエシナママとボクシングの試合をするようになった
教育してあげましょう。マスター！
ママの胸を貸してあげるからどーんとかかっけてきなさい♡
エシナママがロープに身を預けながらグローブの紐を縛りなおす
へよし…、負けないぞ…俺もグローブの具合を確かめ
マウスピースをはめてファイティングポーズを取る

ギョッ



カーンッ！ 試合開始を告げる自動ゴングが鳴る
俺に向かって正対するエシナママ
「さあ？、遠慮なんかしないわよ！ マスターもね♡」



（なんて可愛いファイティングポーズなんだ…）
ついこんなちっちゃな子を殴ったりしても
大丈夫なものだろうかと思っ

様子見にエレナママにリーチ差を生かしたジャブを打ち込んでいく
パンパンッ！ 的確にガードしてこちらの様子を伺っているようだ
へ少し踏み込んでいくか... キュツとリングシューズを鳴らして
ジャブを左ストレートに打ち変える
ビュオッ！
これを強めのパンチと見抜いたのか
エレナママはこれを上体を沈めて身軽に躲した



サッ

『見え見えのパンチよう!』
俺のパンチを躲したエレナママが一步距離を取り
リングを右回りに軽快にステップを踏む。

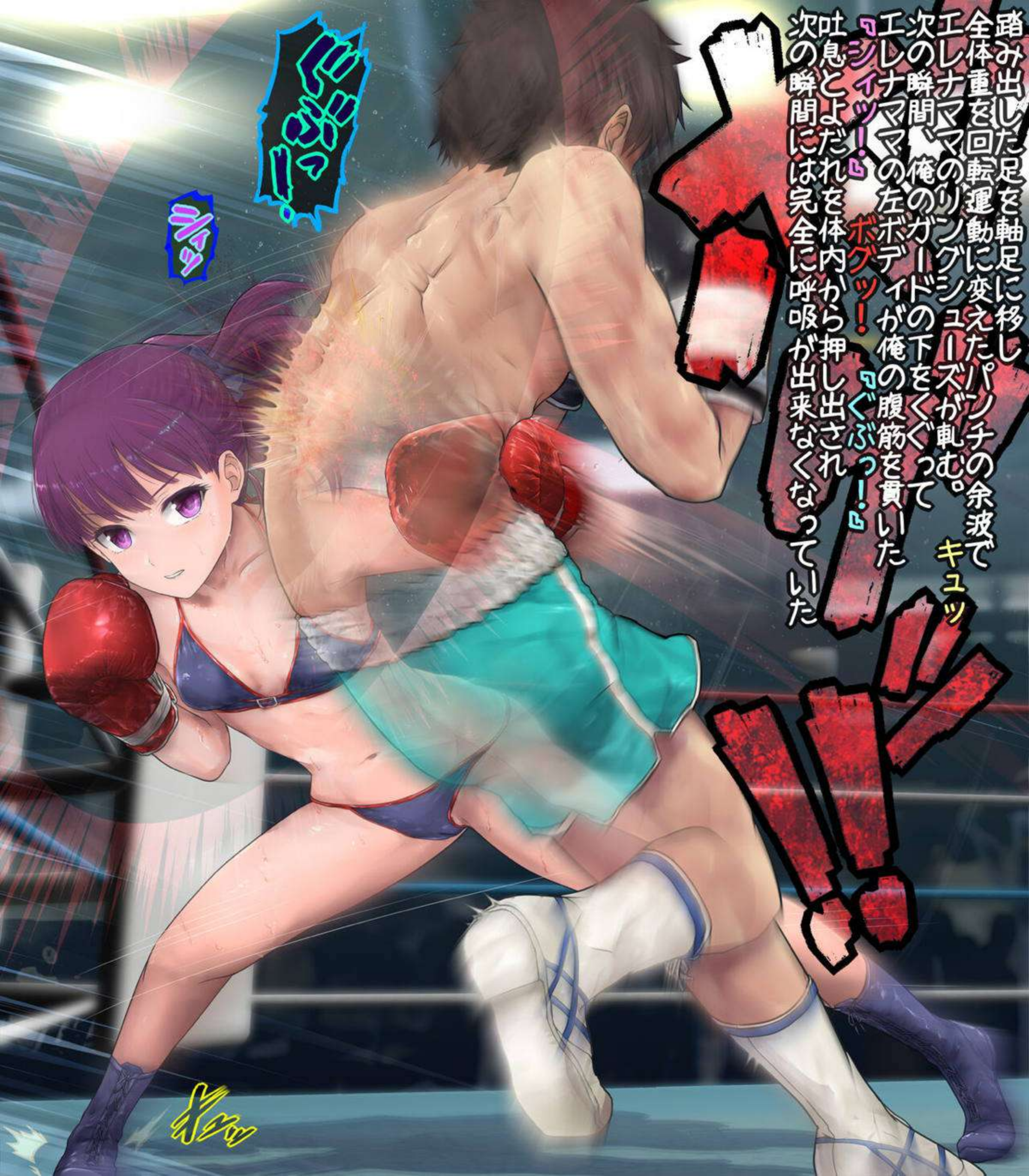


『ちやんと当てて見なさい!』
クイクイとグローブで手招きして
俺にもっと打ち込んでくるように挑発する
(よーし、目にももの見せてやる……!)

さらに踏み込んでエレナママに連打で打ち込んでいく
だがそれをひらりと躲していくエレナママ
「くそっ!」 さらに踏み込んで左フック
エレナママはこれを身体をのけぞらして躲す
「悪くないパンチね、でもっ!」
エレナママが避けた反動を生かして
重心を回転させる

とろろ





パンチ

パンチ

踏み出した足を軸足に移し
全体重を回転運動に変えた
エシナマのリングユーズが
次の瞬間俺のガードの下をくぐって
エシナマの左ボディが俺の腹筋を貫いた
吐息とよだれを体内から押し出され
次の瞬間には完全に呼吸が出来なくなっていた

キュッ

Kyu



うぐ...うぐ...
俺は無様に強烈なボディブローに耐えきれず
前のめりにダウンをしてしまっただけ
これじゃあダメだ...
エレナママが突っ伏した俺を見て誇らしげにガッツポーズを作る
ニユーtralコーナーに向けて歩きながら俺にカウントを数えていく
俺はリングに額をつけたまま、酸素を絶たれた苦しさに身を震わせる

うぐ...うぐ...

しーっくす♡
 はあ…はあ…うえっ…
 めづーん♡…
 んっ、立てたわねマスター♡
 挟まれた胃袋の吐き気に耐えながらも何とか立ち上がる事が出来た
 えらいえらい♡頭なでなであげましょうか？
 ふふっ大丈夫？まだ私とボクシングできる？
 息苦しさで気持ち悪さをこらえながら大きく深呼吸をして頷く
 まだ…やれる…！
 いっ！フアイトね、じゃあ行くわよっ！
 ぐっとエシナママママがグローブを構えなおす

レ
イ
マ
ク
ト
ウ

せふん♡





グニッ

可愛い掛け声とは裏腹に
エシナママの強烈な左アッパーが
俺のアゴを真下から突き上げる。
小さはあんなローブがぐしゃっと限界まで押し潰され
どぱあんと弾けた
ガッコオオッ!!
ブッシュと俺の口の中のマウスピースが
打ち上げ花火のよう
天井に向けて
膝が曲がって
腰が折れ
うがのグンググの音が鳴った
カーンッ!!

「ふーっ♡ 1ラウンドでだいぶボコボコになっちゃったわね♡」
エレナママは這うようにして自分のコーナーまで
ようやくたどり着いたこちらの様子を
余裕たっぷりに観察して言葉をかけてくる

「少し休んだら、また打ってきなさい♡
甘いパンチだとまたボコボコにしちゃうわよ♡
あんなにちゅちゅくて華奢な身体なのに
芯まで響くパンチを繰り出してくる…
ママハトマのカ…
侮ってもらっちゃ困るわよ
マスター♡」



カーンッ！ インターバルの終了を告げるゴングが鳴るとともに
弾けるようにエレナママがコーナーから俺をめがけて飛び出してくると
「はっ！」 ゴッ！！
エレナママの強烈な右アッパーで俺の顔は強制的に天井へと向けられ
鼻血とよだれと汗の花火が爆発する
可愛掛け声とは大違いの破壊力技群のアッパーカット…
俺はアゴを力チ上げられ、天空へとよだれと血を撒き散らした
エレナママのパンチでキャンバスへと大の字で沈められていた



『マスターも今度のアッパーには耐えられなかったわね？
それじゃあカウント入れるわよ♡』
仰向けで天井を見上げてダウンする俺の目の前で
両腕でガッツポーズを作るエレナママ
『フーン、スリー、フォー、ファイブ…』
ニュートラルコーナーで
俺を見下ろしながらカウントを告げるエレナママ

ワン

ツー

スリー





何とか立ち上がった俺はフラフラになりながらも
いまだ闘志の糸は断ち切られていなかった
へこんだちっちゃくてかわいい女の子に
手も足も出ないままボクシングで負けるわけには……
足を引きずるようにエレナママに向かって行き
へろへろの左ストレートを繰り出す
「そらっ!」
俺の打ったパンチはエレナママに軽々と躲され
入れ代わりにエレナママの右ストレートが
俺の頬を跳ね飛ばした
「どうっ!?!」
これがカウンターよう!」
工レナママのグローブが波打つ
俺の顔を潰した衝撃で波打つ
へこんだ小さな女の子にボクシングで負ける……?
「脚がガクガクと震えて力が抜け
またリングに倒れ込んでしまっそうになる
そんな不安がまさに現実のものとなりつつあった

「おっ...と、もうダウンしちゃいそうなの?」
「ぎゅっ」とエシナママに抱きしめられてダウンを妨げられる
「はー!」とエシナママの小振りなおっぱいが押し付けられる
「下から俺の目を覗き込んでくるエシナママ」
「へこんだかわい子にボコボコにされてるなんて...」
「思わずエシナママを抱きしめてしまいたくなるが」
「腰に手を回すだけ体力がつかない」
「今の俺には残さず体力の回復にた」
「そのままとすのが精力的に回復したいだ」
「努めようとするのが精力的に回復したいだ」

ギューッ

はー!

はー!

はー!





「だいたい私の胸で休めたかしら? もういいわよね? 行くわよっ!」

俺の身体を突き放したエレナママが再び攻撃を繰り出してくる

踏み込んだエレナママの右ストレート

反動を生かして体重をスライドさせた2発目の右ストレート...

見事なダブルストレートが俺の顔面にきれいに収まる
闇雲に右フックを振り回したままの俺は
エレナママはその間合いから一瞬で引いていた

「うっ……く……」
「ふーっ……」
エレンママは俺の迎撃範囲ギリギリを
キュッキュッとリングを回っている
鳴らしながら、はんげきを……！
（はんげきを……！）
その時エレンママが
再び踏み込んでくる気配を見せる。
だがそれは俺のパンチを
誘った動かしだった。
俺は動きに釣られて
まんまと大振りのパンチを
繰り出してしまった

「ふっ……」
エレンママはそんな俺のうかつな右ストレートを
腰を落としてかいくぐり、
俺のパンチはエレンママの頭上をかすめて終わる
一方エレンママは自分のリーチまで到達したと同時に
ギュッツツとエレンママの鋭いパンチが飛んだ
「シュッ！」「バコンッ！」
エレンママの強烈な左ストレートが俺の顔面を叩き潰す

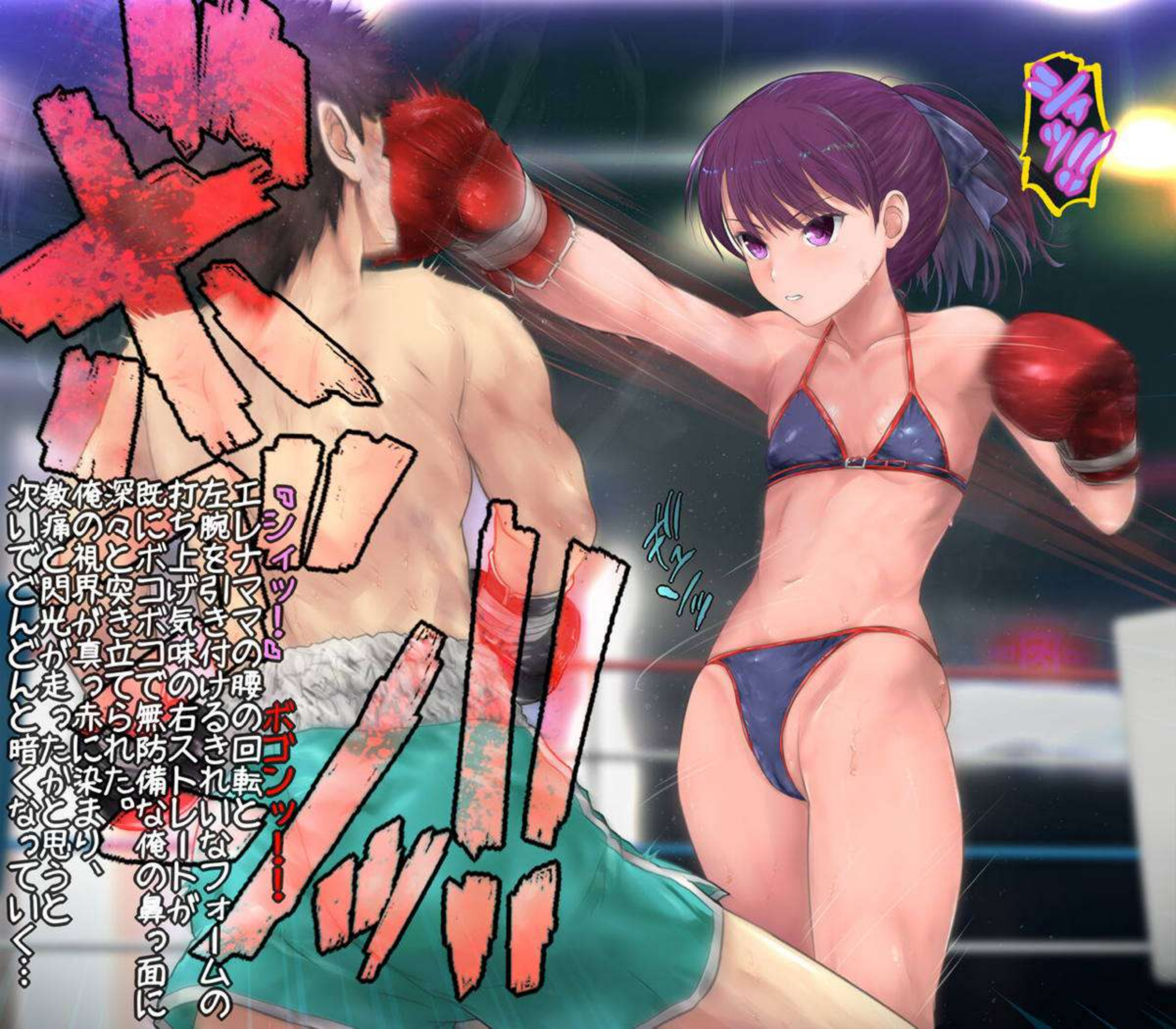
おろろろ

キッ

キ

「ぐぶっ...」 エレナママが左ストレートを俺の顔面に打ち込んだ反動を
そのまま右回転へと変換する **ギャンツッ!**
俺にはもはやそのパンチに
逆らえるだけの体力はなかった...。
猛烈な勢いでエレナママのグローブが
迫ってくる
それはそのまま
俺の顔面へと
吸い込まれていく





工しナママの腰の回転とな
 左腕を引き付けのけるきれいなフォームの
 打ち上げ気味の右ストライクが
 既にボコボコで無防備な俺の鼻っ面に
 深々と突き立てられ染まり、
 俺の視界が真っ赤に染まり、
 激痛と閃光が走ったかと思っ
 次いでどんどんと暗くなっ
 いでどんどんと暗くなっ

エシナママが俺の顔面に深々と突き刺さったグローブを引き抜くと
鼻血がべっとり付着したグローブと俺の顔面の間に
糸を引いて赤い橋が架かる

おはっ

はッ

う

俺はエシナママの右ストリートに意識ごと刈り取られ
腰が落ちて最下段のロープに完全に腰を落としてしまっ
た。あはっ♡♡♡生存本能でやっかしく
私のパンチでこんなにおちんちん勃起させちゃって...♡♡
ばうーんとロープが俺の全体重を受け止めて
リングへの完全落下を食い止めた

おはっ

ズル...



潰れたカエルの千物のようにリングに沈んでいる俺を、
そばに立って悠々と見下ろすエレナママ…
「ふん♡♡♡もう立ってこられないと思うけど、
一応カウント入れるわね？」
「ちやんとマスターが負ける最後の瞬間まで、
こうして見てあげからね♡♡♡」
「じゃ、わーん♡♡♡すりー♡♡♡」
「ふおー♡♡♡いぶ♡♡♡」

ふん♡♡♡

ないん

2-4-1

かんかんかん

ツキ

『がんばったマスターには
ご褒美を上げないかね♡』
『あ…うあ……？』
『ようやく顔を上げられるようになったところには
エシナママ相手に完全に敗北した後だった』

大の字でキャンバスにのびたままの
俺のトランクスを引きはがし
体にのしかかってくるエレナママ
「あはっ♡」
ビンビンに勃起した俺のペニスが
エレナママの顔とこんなにちはする
「あらあら、
大変なことになっちゃってるわね？」



ちゅっ♡
そんなみっともない俺のペニスに
愛おしそうにキスするエシナママ
「じゃあお口で気持ちよくしてあげるわね♡」



ぐぼぐぼと空気の出入りする音を立てながら
エレナママの小さなお口が
俺のモノを咥え込んで上下すると
目の前の息がかかる距離で
エレナママのビキニの股間が
なまめかしく揺れる



ぐぼっ♡

ぐぼっ♡

ぬちゅ♡

ぬちゅ♡

いやらしい水音は俺の股間からだけでなく
目の前で湿り気を帯びた
エレナママの股間からも漏れてくる
そんな淫靡な光景に情けなく
エレナママの口中で果ててしまった
ビュグッ! ドクッ! 「んむっ...♡」
「あらあら...もう射精しちゃったの?
これからが本番なのに
全くこらえ性がないわね...」



ちゅぽっ



マジじゃあ次は…
マスターの大好きな事をしてあげようかしら♡
エレナママはビキニトップの紐を緩めて
双丘をあらわにする
エレナママのふよふよに柔らかい、
それでいてしっとりとした大福のような
小振りなおっぱいでガチガチに硬くなってしまうたペニスを挟まれて…
ぱふっ♡ぱふっ♡硬いのね♡
ロの中全部納まってしまっような白いお餅のようなエレナママのおっぱい…
ペニス全部包みきれないのに…
こんなに気持ちいいなんて…



試合の間から私のマウスピースの中に溜まったよだれで
ぬるぬるにしてあげるわね♥
たらーとエシナママの可愛い口元から
きらきらした粘性の液体が俺のペニスに垂らされる…
エシナママの体温が俺の先っちょから広がって
ぬるぬるにされていく…

たらー





ぷるっ♡ ぷるっ♡
かわいい乳首が俺のペニスのすぐ脇でリズムカルに上下する
ううっ…っ… あまりの気持ちよさに思わずぐくぐくと足が震える
マスター、また射精しちゃいそうなの？
そんなに飛ばしてたら私に押れる前に弾切れになっちゃうわよ？
俺のペニスを挟んだまま上目づかいで俺を見上げるエレナママ

ぷるっ♡

ぷるっ♡

にゅるっ♡

にゅるっ♡

「うっ…」
「どくっ」
「どくっ」

我慢できずにエシナママの胸の中に精液を暴発させてしまった…

「あゝ、もう射精しちゃった♡」

全部挟み切れてないのに射精しちゃうなんて
マスターはおいっぱい好きね♡

おしこ

「じゃあ最後に…
お望みの魔力供給のレッスンを始めましょうか♡
ふふっもうトロトロになっちゃったから
マスターの挿れちゃうわね♡」
エレナママは今度は俺の股間にまたがると
ためらいなく俺のペニスを
自分の内側へと吞み込んでいく…
「んっ…♡」



「ふっ♡ふっ♡ふっ♡」
ちっちゃなお尻を何度も何度もピストン運動で
俺の下腹部に打ち付ける
その度にエレナママの控えめなおっぱいが小さく弾む
エレナママのキツキツのおまんこに
あっという間に果ててしまいそうだ

「ほら…♡ もっとここに集中しなさい♡」
股間に射精感が、ギューツとこみあげてくる
「ううっ…」びゅーっ!びゅっ!びゅっ!
次の瞬間にはエレナママの膣内に
思っさま射精してしまっていた



「ふふっ！ っぱい！ 射精しちゃったわねマスター♡
気持ちよかった？」
こくこくと頷いて見せる俺。
最高に気持ちよかったものの
俺はエレナママにノックアウトされた直後で
体力の方は既に限界を迎えていた



『マスター？ このくらいで終わりだなんて思っていないわよね？
もっとマスターから搾り取ってあげるから覚悟しなさいよ♡』
エレナママが繋がったまま、なおも次のラウンドを要求する

ずばり...

しゅん



エレナママが俺のペニスを奥まで飲み込んで
円を描くように腰をグラインドさせる
『どう？』
『続ける気になったかしら？』
エッチな腰の動きにエレナママの中で
竿が再び鎌首をもたげてくる



ちゅん♡ちよつと硬くなってきたわね♡
じゅぷっ
エシナママがおもむろに上下運動を再開する
でもさっきよりも硬度が落ちてるわよう？
ちよつと射精しすぎちゃったかしらう？

ずぷっ♡

じゅぷっ♡



「そういえばKの寸前の時にマスターってば
おちまんちんギンギンになっちゃったわよねば
このままパンチしたらもっと元気になっちゃうのかしら?」
「エレナママは俺の真上で上下しながらそう言ってる
グローブをぐっ」と握り込む

ぐっ
ぽんっ♡

ぽんっ♡



正しナママが俺の顔面に
笑顔でマウントパンチを繰り出す
俺は思わず苦しそうな声を漏らしてしまう

ボゴオッ!

あ

あ



ふっ！ もう一発♡
ボゴオッ！
無防備な顔面に落とされた
工しナママのワンツーパンチに体がビクッと震え
俺は自分の無力さに、悔しくなったにも関わらず
陰茎に血液が集まりひとときわ固くなってしまう

ふっ！

ぐわん

可ふふっ♥
俺を殴りながらいいじゃない♥
どう? 負けちゃったの、ちやな女の子に
殴られながら犯されちゃうの、気持ちいいかしら?」
悔しいのに気持ちいい...

オオオオオ



くちゅ
ミッポ



A hand-drawn diagram of a plant. It features a central vertical stem with several green, oval-shaped leaves attached. At the top of the stem is a pink flower with five petals. The drawing is done in a simple, illustrative style.

A close-up, detailed illustration of a red boxing glove. The glove is shown from a side-on perspective, highlighting its padded shape and the texture of the red material. Two white elastic wristbands are visible at the base of the glove, securing it to the hand. The background is a soft, out-of-focus blue and white, suggesting an indoor sports arena.

エシナママに殴られながら、
何れ射精してしまっただろう…
これです MASTER の精液も打ち止めかしら？
ぬのぽとエシナママのおまんこから
俺のペニス引き抜かれると
エシナママの中に溜まっていた大量の精液と共に
ぼろんと竿がしなだれ落ちる。
まだエシナママのおまんこからは
精液がとぷとぷと溢れて
俺の腹の上に水たまりを作っている

ふーっ♡

ふーっ♡

ママスター、動かなくなっちゃったけど
ちやんと生きてるわよね？
こっちはなかなかにツクアウトしたけれど
おちいんちでもお相手してあげるわよ、マスター♡♡
またいい時もあってくれるわよ、マスター♡♡
エシナママは本当に満足げな笑顔だった…



『えっ、私とボクシングしたいの？』
リング上でマスパーをしていると
それを見ていたマスターが私とスパーの申し出をしてきた

『マスターも知っての通り私は魔術師だから…
体術はそれほど得意なわけでは無いのだけれど…
言いよどむ私に、マスターは驚くくらい熱心に
説きつけてきた』





「いいわ、そこまで言うのなら…
拳闘は少しかじって時々練習している程度なのだけれど
それでもよしかったら私が相手してあげましょう♡」
「そううとマスターがぱあっと嬉しそうな顔になる♡」
「そのあと魔力同調のレッスンもしてあげましょうか?」
「魔力供給…?」
「セックスのことではないの!」
「でもマスターがお望みなら、そっちの手ほどきをしてあげても…よくってよ♡」
「私は少し照れながら、グローブを口元に引き寄せてウインクをする♡」
「マスターがにっこりしてる…♡」

そんなこんなで私はマスターとボクシングの試合をするようになった
教育してあげましょう。マスター！
ママの胸を貸してあげるからどろんどろんとががってきなさい♡
ロープに身を預けながら私はグローブの紐を縛りなおす
へよし、行くわよ！マスターもグローブの具合を確かめ
マウスピースをはめてファイティングポーズを取る

ギンッ



カーンッ！ 試合開始を告げる自動ゴングが鳴る
私はマスターに向かって正対する
「さあっ、遠慮なんかしないわよ！ マスターもね♡」



なかなか一歩を踏み出してこないマスター
「ドギマギしてるわね…、少し誘いを入れたほうがいいのかしら？」

様子見とばかりにマスターはリーチ差を生かしたジャブを打ち込んでくる
パンパンッ! これを的確にガードして様子を見る
へんっ! 来るわね...!
マスターはギュッとリングシューズを鳴らして
ジャブを左ストレートに打ち変える
ビュオッ!
これを強めのパンチと見抜いた私は
上体を沈めて身軽に躲した



『見え見えのパンチよう!』
マスターのパンチを躲すと一歩距離を取り
リングを右回りに軽快にステップを踏む。

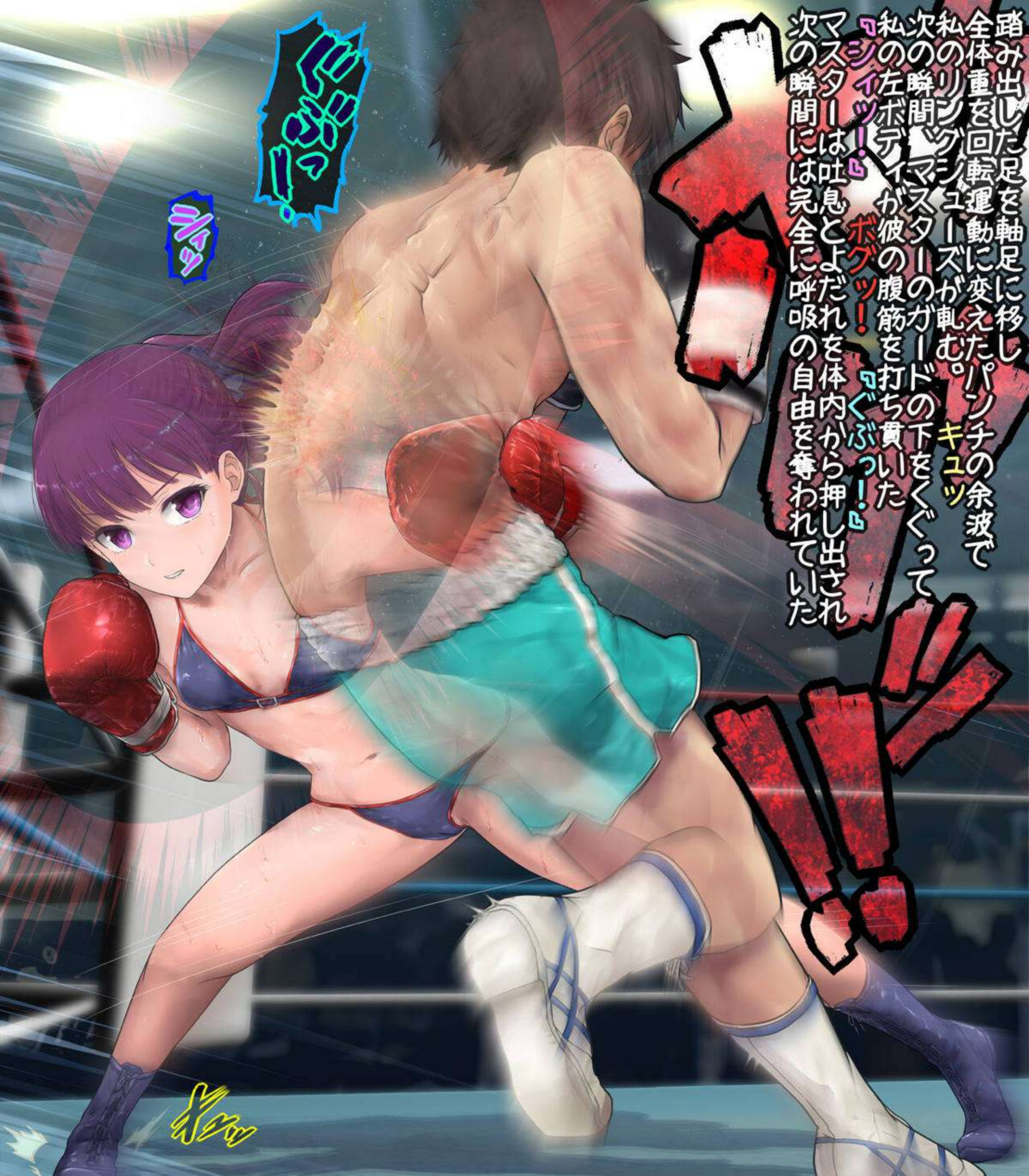


『ちやんと当てて見なさい!』
クイクイとグローブで手招きして
マスターにもっと打ち込んでくるように挑発する。
(私に本気を見せて見なさいっ!!)

さらに踏み込んでマスターは私に連打で打ち込んでくる
だが私はそれをひらりひらりと躲していく
くそっ！ マスターはさらに踏み込んで左フック
私はこれを身体をのけぞらして躲す
悪くないパンチね、でもっ！
私は避けた反動を生かして
重心を回転させる

とろろ





踏み出した足を軸足に移し
全体重を回転運動に変えた
私のリングマシンが軋む
次の瞬間、マシンが彼の腹筋を打ち貫いた
私の左ボディが彼の腹筋を打ち貫いた
マスタは吐息とよだれを体内から押し出された
次の瞬間には完全に呼吸の自由を奪われていた

パンチ

パンチ

キュッ

Shin



うぐ...うぐ...
私の強烈なボディブローに耐えきれず
前のめりに倒れた無様な様子に
これい決まったえ♡
私は突っ伏した彼を見て誇らしげにガッツポーズを作る
私はゆっくりとニュートラルコーナーに向けて歩きながら
マスターはリングに顔をつけたまま、
マスターはリングに顔をつけたまま、
酸素を絶たれた苦しさに身を震わせている

もうダウンしちゃった♡

うぐ...

うぐ...

うぐ...

マスタァはあ…はあ…うえっ…
マスタァはえづきながらも何とか立ち上がる事が出来た
ふふっ、いえらい♡ 頭なでしてあげましようか？
マスタァが私を睨みながら大きく深呼吸をして頷く
『まだ…やれる…！』
ぐっと私はグローブを構えなおしてマスタァに襲い掛かる
『んっ、立てたわねマスタァ♡』

しーっくす♡

せぶーん♡

ぐっ





バックフist

私の全力の左アツパーが
私のスターのアゴを真下から突き上げる。
私の拳を包んだグローブが
ぐしやっとなんかまで押し潰されどばあんと弾けた
ガッコオオンッ!!
ブッシュとマスターの口の中のマウスピースが
打ち上げ花火のように雨とともに発射される
天井に向けてやだれの雨とともに笑いだしたところ
マスターの膝がガクと笑い
腰がリンドグの向けて自由落下し始めたところ
うがンドグの向けて自由落下し始めたところ
うがンドグの向けて自由落下し始めたところ

カーンッ!!

「ふーっ♡ 1ラウンドでだいぶボコボコになっちゃったわね♡」
私は這うようにして自分のコーナーまで
ようやくたどり着いたマスターの様子を
じっと観察しながら言葉をかける

「少し休んだら、また打てきなさい♡
甘いパンチなら、またボコボコにしちやうわよ♡」
「ボロボロになっちゃったマスター... 私のパンチで...♡」
「毎マハトマの力... 困るわよ」
マスター♡♡





ズッ

カーンッ！ インターバルの終了を告げるゴングが鳴るとともに
弾けるように私はコーナーからマスターめがけて飛び出していく
『はっ！』 ゴッ！！
私の渾身の右アッパーでマスターの顔は強制的に天井へと向けられ
鼻血とよだれと汗の花火が爆発する
突進力をそのまま破壊力へと全部乗せたアッパーカット…
マスターはアゴをカチ上げられ、天空へとよだれと血を撒き散らしながら
私のパンチでキャンバスへと大の字で沈められていた

『マスターも今度のアッパーには耐えられなかったわね？
それじゃあカウンント入れるわよ♡』
仰向けで天井を見上げてダウンするマスターの目の前で
両腕でガッツポーズを見せてつける
『フーン、スリー、フォー、ファイブ…』
私はニュートラルコーナーで
マスターを見下ろしながらカウンントを告げていく

ワン

ツー

スリー





何とか立ち上がったマスターは
フラフラになりながらも
いまだ闘志の糸は断ち切られていなかった
へさすがね、これだけ殴られて
まだ立ち向かってくるなんて！
足を引きずるように私に向かってくると
へろへろの左ストレートを繰り出す『そらっ！』
マスターの打ったパンチを私は軽々と躲し
入れ代わりの私の右ストレートが
マスターの頬を跳ね飛ばした
『どうっ！？』これがカウンターようー！
私のグローブが潰れた衝撃で波打つ
マスターの顔面を飛んじやったかな...？
へあっ、ちよつと飛んじやったかな...？
マスターの脚がガクガクと震えて力が抜け
またリングに倒れ込んでしまっそうになる

オ
キ

『おっ……と、もうダウンしちゃいそうなの？』
『マスターのマスターを抱きしめてダウンを妨げると
マスターのみにぞおちに私ののおっぱいが押し付けられる
息も絶え絶えのマスターの目を下から覗き込む
（ふふっ……、じゃがいもみたいになっちゃうた♡）
思わずぎゅっ、と抱きしめてしまおうが
マスターの方は荒い息で
私の腰に手を回した位だった
（まだボクシングでできるかな……？）

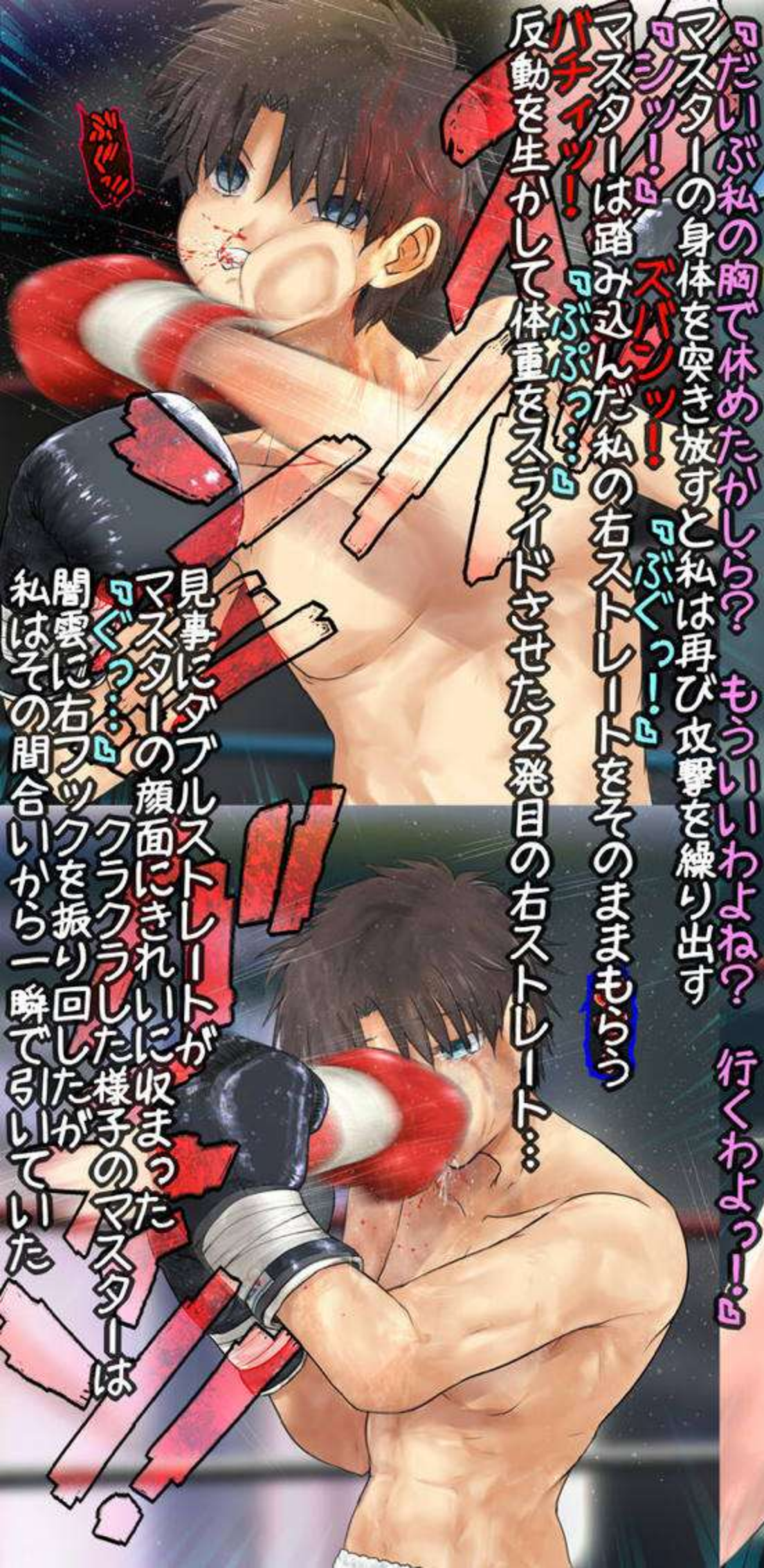
はー！

はー！

はー！

ギューッ





「だいたい私の胸で休めたかしら? もういいわよね? 行くわよっ!」

マスターの身体を突き放すと私は再び攻撃を繰り出す

マスターは踏み込んだ私の右ストレートをそのままもらっ

反動を生かして体重をスライドさせた2発目の右ストレート...

見事にダブルストレートが収まった
マスターの顔面にきれいに収まった
マスターはクラクラした様子のマスターは
間雲に右フックを振り回したが一瞬で引いていた
私はその間合いから一瞬で引いていた

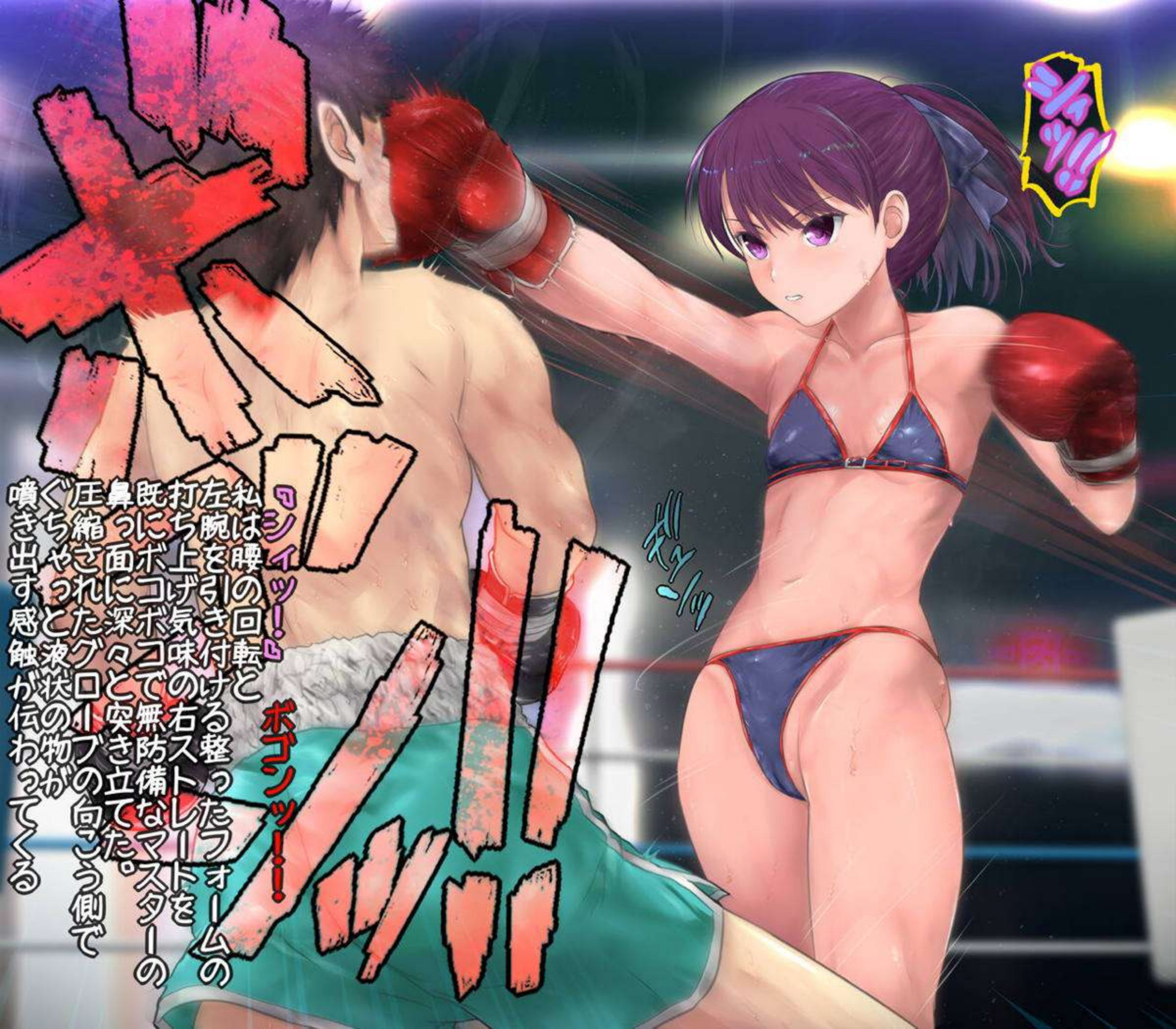
「うっ……く……」
私はマスターの迎撃範囲ギリギリを
キユツキユツとリングシューズを
鳴らしながらリングを回って様子を見る
（まだ打ってこられるわね……!）
私は再び踏み込んでくる気配を見せて
フェイントをかけろ。
マスターは私の動きに釣られて
まんまと大振りのパンチを
繰り出してしまった

「ふっ!」
私はマスターの
腰を落とすかつかう右ストレートを
私の頭上をかすめて終わると、マスターのパンチは
一方私は自分のリーチまで到達したと同時に
ギョッ!と鋭いパンチを放った
私の強烈な左ストレートが
マスターの顔を叩き潰した



ぐぶっ... 私は左ストレートをマスターの顔面に打ち込んだ反動を
そのまま右回転へと変換する **ギャンツッ!**
マスターにはもはやそのパンチに
逆らえるだけの覇気は感じられなかった。
猛烈な勢いで私のグローブが
迫っていたが
それはそのまま
マスターの顔面へと
吸い込まれていく





全力一撃

私には腰の回転と
左腕を引きつける
打ち上げ気味の右
既ちボコボコで無防
鼻っ面に深々と突き
圧縮されたグロブの
ぐちゃっとな液状の
噴き出す感触が伝わ
てくる

コシイッ!

ボコッ!

フォームの
マストの

私がマスターの顔面に深々と突き刺さったグローブを引き抜くと鼻血がべっとりと付着した私のグローブとマスターの顔面の間に糸を引いて赤い橋が架かる

おはっ

はッ

う

マスターは私の右ストリートに意識ごと刈り取られ
腰が落ちて最下段のロープに完全に腰を落としてしまっ
たあはっ♡生存本能でやつかしらう？
私のパンチでこんなにおちんちん勃起させちゃうて...♡
ばうーんとロープがマスターの全体重を受け止めて
リングへの完全落下を食い止めた

おちんちん

ズル...

『かわいそうだけど、これでマスターに確実にとどめを刺させてもらうわねっ！』
『一切の容赦もない真っ赤な小振りの断頭台の刃が、マスターの沈み行く顔面に向かって振り下ろされる。ぐちゃっ！！』
『もはやマスターは無様に私の全体重を込めたパンチを無抵抗で顔面に受け入れる以外にはなかった。』

『ぐちゃぐちゃの顔面を潰されながら、さらに鼻血を絞り出させられ、足の裏を天井に向けてカエルのように大股開きになって屹立させたおちんちんを揺らしてキャンバスに沈む。』
『衝撃の反動で私のおっぱいを揺らしてキャンバスに沈む。』
『決まったわね、気持ちいい感触。』
『マスターは顔面を虫けらのように私のグローブで潰され、衝撃の逃げ場もなくキャンバスとサンドイッチにされ、処刑されてしまうのだ。』





潰れたカエルの千物のようにリングに沈んでいるマスター。
そのそばに立つて悠々と見下ろす……。
「ふーん♡♡♡もう立ってこられないと思うけど、
一応カウント入れるわね？」
「ちやんとマスターが負ける最後の瞬間まで、
こうして見てあげからね♡♡♡」
「じゃ、わーん♡♡♡すりー♡♡♡」
「ふーん♡♡♡いぶ♡♡♡」

ふーん♡♡♡

私は大の字でキャンバスにのびたままの
マスターのトランクスを引きはがし
体にのしかかる
「あはっ♡」
試合中からビンビンに勃起した
マスターのおちんちんがこんにちはする
「あらあら、
大変なことになっちゃってるわね？」



ちゅっ♡
そんな大変なことになってしまっている
マスターのおちんちんに愛おしそうにキスをする
「じゃあお口で気持ちよくしてあげるわね♡」



ぐぽぐぽと空気の出入りする音を立てながら
私はマスターのおちんちんを
口いっぱいにはおぼりながら
咥え込んで上下する
(んっ…熱くておっきい…♡)



いやらしい水音がマスターの股間からだけでなく
湿り気を帯びた私の股間からも漏れてくる
(マスターのでスイッチ入ってきちゃった...♡)
やがてマスターのおちんちんが激しく脈動する
ビュグッ! ドクッ! 「んむっ...♡」
「あらあら...もう射精しちやったの?
これからが本番なのに
全くこらえ性がないわね...」



「ちゃんときれいにしてなきゃね♡」
ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡
私は尿道に残った精液を丹念に吸い取る…
そしてマスターのさきっちよを
舌で回すように転がしてきれいにお掃除した
「ほら、これできれいになった♡」
おちんちんも…ふいっ♡
もう硬くなってきたわね♡」



『じゃあ次は…、
マスターの大好きな事をしてあげようかしら♡』
私はビキニトップの紐を緩めて
双丘をあらわにする
小振りなおっぱいをグローブで目一杯に寄せて
ガチガチに硬くならないでしまったマスターのおちんちんを挟みこむ
ぱふっ♡
おっきなおちんちんを全部挟みこめないまま
ずりずりとおっぱいで摩擦してマスターを気持ちよくしてあげる

あふっ♡



試合の間から私のマウスピースの中に溜まったよだれで
ぬるぬるにしてあげるわね♥
たらーっとおちのちの垂らしていきよだれを
マスターのおちのちの先っちょから
舌を出してマスターのおちのちの先っちょから
よだれで爆撃してぬるぬるにしていく...

たらーっ





ぷるっ♡ ぷるっ♡
マスターのおちんちんのすぐ脇で私の乳首がリズムカルに上下する
ううっ…っ… マスターがあまりの気持ちよさに思わずぐくぐくと足を震わせる
マスター、また射精しちゃいそうなの？
そんなに飛ばしてたら私に弾切れになっちゃうわよ？
マスターのおちんちんを挟んだまま目づかいでマスターの目を見上げる

にゅる

にゅる

にゅる

にゅる

「うっ…」
マスターが我慢できずに私の胸の中に精液を暴発させる。
「ああ、もう射精しちゃった♡」
全部挟み切れてないのに射精しちゃうなんて
マスターはおっぱい好きね♡♡

ぶっお

どく、
どく、



「じゃあ最後に…
お望みの魔力供給のレッスンを始めましょうか♡
ふふっもうトロトロになっちゃったから
マスターの挿れちゃうわね♡」
私は今度はマスターの股間にまたがると
ためらいなくマスターのおちんちんを
自分の内側へと呑み込んでいく…
「んっ…♡」



「ふっ♡ふっ♡ふっ♡」
マスターに跨ってお尻を何度も何度もピストン運動で
マスターの下腹部に打ち付ける
その度に私おっぱいが小さく弾む
マスターのおちんちんが
私の一番気持ちいい所を
刺激する



「ほら…♡ もっとここに集中しなさい♡」
マスターのおちんちんがビクッと私の中で震える
「ううっ…」びゅっ!びゅっ!びゅっ!
次の瞬間にはマスターは私の膣内に
思っさま射精してしまっていた



「ふふっ！いっぱい射精しちゃったわねマスター♡
気持ちよかった？」
こくこくと頷いて見せるマスター。
私も最高に気持ちよかったものの
まだまだ物足りてはいない



「マスター？ このくらいで終わりだなんて思っていないわよね？
もっとマスターから搾り取ってあげるから覚悟しなさいよ♡」
私はマスターに繋がったまま、なおも次のラウンドを要求する

おっぱい...

しゅわん



私はマスターのおちんちんを奥まで飲み込んで
円を描くように腰をグラインドさせる
『どう？』
『続ける気になったかしら？』
腰の動きに反応して私のナカで
マスターの竿が再び鎌首をもたげてくる



♡ん♡♡ちよつと硬くなってきたわね♡♡
ずぷっじゅぷっ
私はおもむろに上下運動を再開する
でもさっきよりも硬度が落ちてるわよう？
ちよつと射精しすぎちゃったかしらう？

ずぷっ♡

じゅぷっ♡



「そういえばKの寸前の時にマスターってば
おちんちんギンギンになっちゃってたわよねば
このままパンチしたらもっと元気になっちゃうのかしら?」
私はマスターの真上で上下しながらそう言っていて
グローブをぐっと握り込む

ぐんっ♡

ぽんっ♡



私はマスターの顔面に
笑顔でマウントパンチを繰り出す
ぐうっ...
マスターが苦しそうな顔をする

ボゴォッ!



ぐうっ...
マスターが苦しそうな顔をする

ふっ！ もう一発♡
無防備な顔面に落とされたワンツーパーンチに
マスタ―は体をビクッと震わすと
悔しそうな表情をさせながらも
おちんちんに血液が集まり
ひとときわ熱く固くなってくる

ボゴオッ！



ふっ！

たっ！

可ふふっ♡
私はマスターを殴りながらリズムミカルに腰を上下させる
殴らなから犯されちゃうの、気持ちいいかしら？
マスターはボコボコの顔なのに嬉しそうに見える

オオオオ



可ふーっ♡ふーっ♡ふうん…やっぱりマスターって
女の子にパンチされて硬くなっちゃうのね♡
私はマウンtpanチの特機姿勢になりながら腰を上下させる。



すばる♡



すばる♡



『マスターってマゾ男くんだったの？
これならまだ何回も楽しませてくれそうね♡
マウンtpanしたままもっとなボコボコにして射精させてあげる♡
マスターの上で上下しながら私は無慈悲な処刑宣言をする♡』

マスターは私に殴られながら、
何発射精してしまっただろう...

これでマスターの精液も打ち止めかしら?」

マスターのおちんちんを引き抜くと

私の中に溜まっていた大量の精液と共に

ぼろんと竿がしなだれた。大量の精液と共
まだ私の膣内からは精液がとぷとぷと溢れて
マスターのお腹の上には水たまりを作っている

ふーっ

ふーっ

マスター、動かなくなっちゃったけど

こっちは生きてるわよね?

おちんちんも完全ノックアウトしちゃったわね

私は本当に満足した笑顔をマスターに向けた

だん...

いっ...





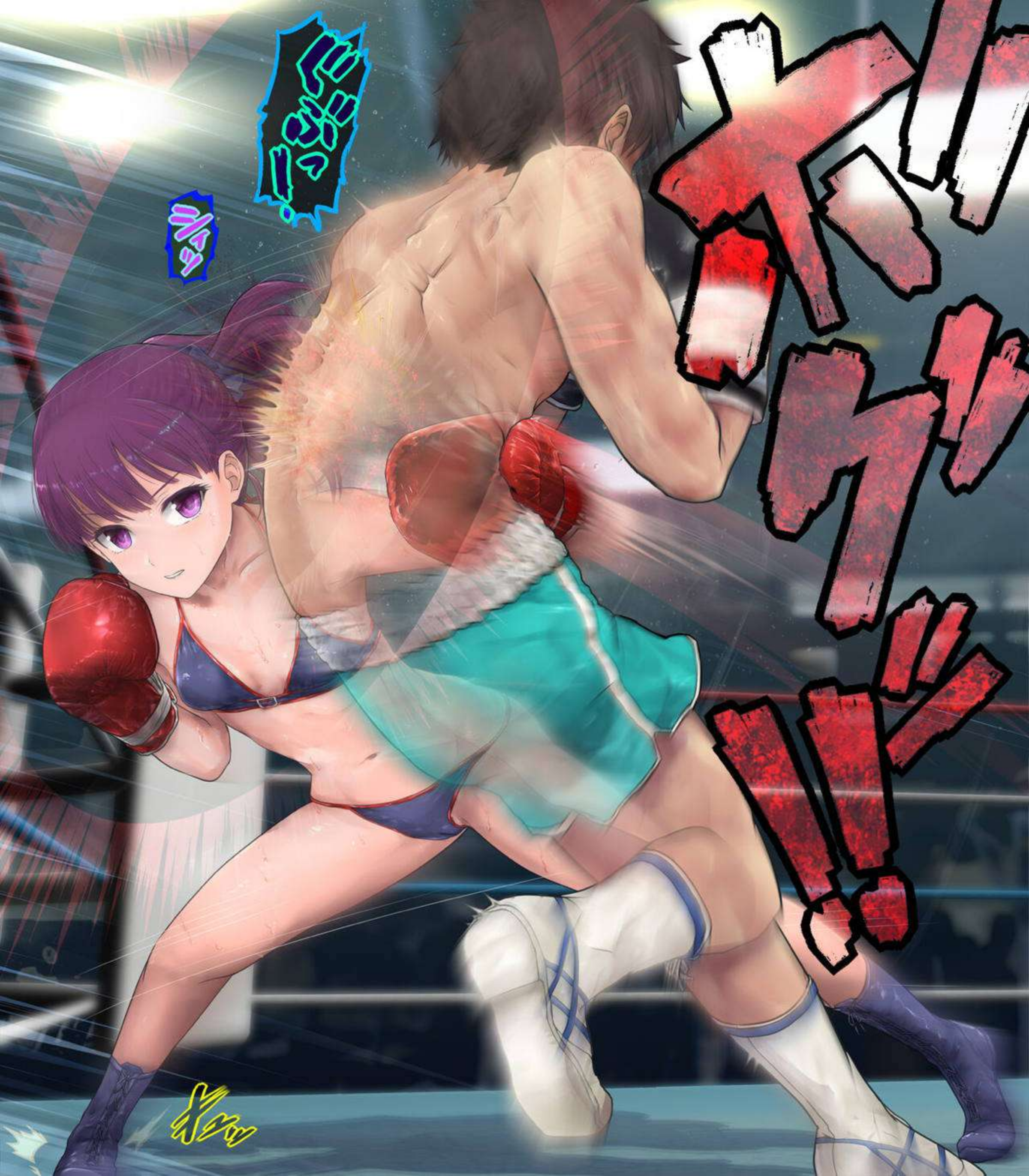












パンチ

パンチ

パンチ

Nana





せーのーん♡

しーくす♡

ふ









フッ

フッ

スリー

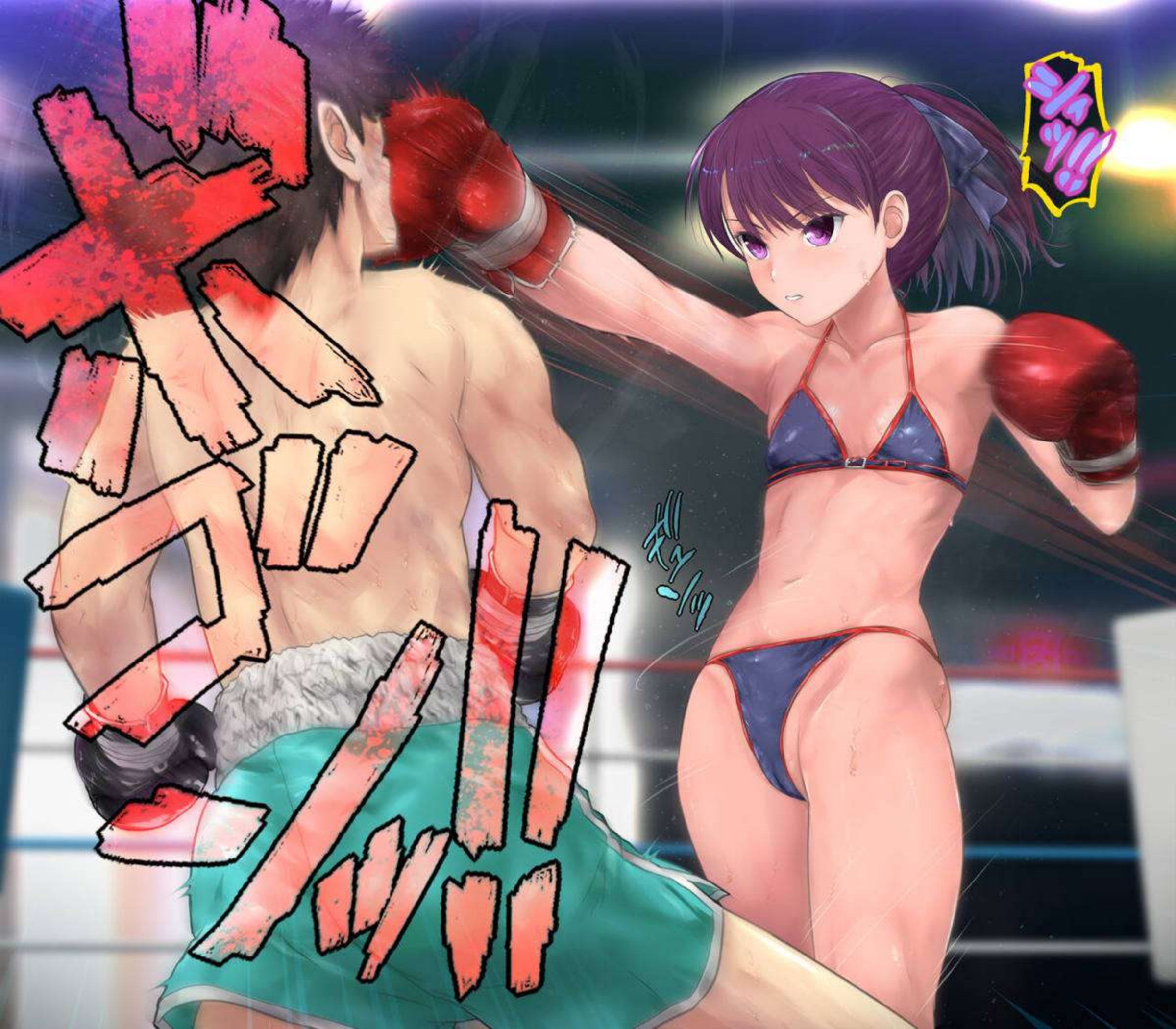














はっ

うーん

うーん

ん

おは

ぐわん

ズン..







かーんかーん♡

なーん♡

グッ



















びしょ

びしょ

























